上田千曲高校
同窓会便り

発行所
長野県上田市中之条626
上田千曲高等学校同窓会
TEL㉒7070 〒386
代表 滝崎 隆
印刷所 （有）竹内印刷

昭和五十二年度上田千曲高校同窓会
総会開催のお知らせ

●日時　昭和52年11月3日（木）
午後1時30分より
●場所　上田千曲高校　会議室

＊議　題＊

一、開会の辞
一、校歌斉唱
一、挨拶
一、会務報告
一、51年度決算報告
一、52年度事業予算案審議
一、母校校舎全面改築に関する件
一、その他
一、閉会の辞

会員の皆さんへ

同窓会長　滝崎　隆

昨年、一昨年の総会は市街地に会場を設け講演会・アトラクション・懇親会等が盛会に行なわれました。これもひとえに同窓生諸氏のご協力の賜ものと厚く感謝いたします。

さて、本年は母校の全面改築事業も七割がた完成し、旧校舎は九割撤去されたなかで新校舎において久しぶりに「学校開放」的な千曲祭が催されようとしています。面目一新した新校舎が始めて一般に公開される訳であります。そこで本年は旧校舎を忍びつつ母校での総会をと企画いたしました。当日は新校舎見学かたがた多数同窓生お誘い合せのうえ総会にご出席いただきたくここにお知らせ致します。

住所簿の不備等によってこの通知が届かない方々もおろうかと思いますが、同窓生の皆様にお互いにお知らせ願い十一月三日には多数の方々にお集りをいただき総会が盛大に開催できますよう御案内申し上げます。

同窓生の皆様へ

校長　塩原松美

校舎改築の工事が着手されてから既に数年を経過して近代建築の新校舎も次第に整備されてきました。その間同窓会員の各位のご支援とご厚情を賜わり、石油危機以後の経済不況の中で順調に進展できましたことを有難く感謝申しあげております。既に南北HR棟・管理棟・体育館・工業科実習棟（建築・電気・機械）が完成し、生徒は新装なったこれらの施設の中で学習に励んでおります。残った商業科・家庭科の実習棟も十月に着工し来夏に竣工の予定となっています。計画された施設・設備が完成するまでには後数年を要するものと思いますが、昨年と今年にかけて校門・ロータリー・自転車置場などの建設と周辺の植樹など校舎前面の整備が終りましたので、この機会に暫くの間校内祭で過してきた文化祭を本年度は学校開放の日を設けることに致しました。これらの工事には同窓会の醵金など期成同盟会の貴重な資金の一部を県費の補助として使用させていただきました。改めてご厚志をお礼申しあげます。旧校舎の取壊しとグランド整地の工事が昨年度から始まり昭和五十三年度中には終了する計画で進んでおります。同窓生の皆様方が親しく学ばれた校舎も現在は一部残存されておりますので、この機会に想い出多い校舎に名残りを惜しまれ、新校舎に千曲高校の発展への期待を寄せられ、後輩をご激励下さるよう万障繰合わせてご来校の程お待ち申しあげております。私共生徒職員は先輩各位の残された質実剛健の良き伝統を継承しながらも、新しい革袋には新しい酒をの諺のように新しい校風作りに努めて参りたいと念じております。千曲祭は生徒会の実行委員会が中心となって計画と準備を進めておりますが、地域や先輩の皆様に展示・研究発表などをご覧願って、さゝやかながらも私共の活動をご理解いただき、ご指導ご教示を直接賜わりたく期待して頑張っております。

最後に本校定時制野球部の全国大会出場に際しまして、同窓会本部と関東支部の各位から格別なご後援とご厚志をいただきましたこと心からお礼申しあげます。

ここに会報発行に当りお礼とお願いの気持をこめて簡単ながら近況をご報告申しあげてご挨拶といたします。

校舎全面改築経過報告

教頭　召田　十　年

秋涼の候、同窓会の皆様には、いよいよご清栄のこと、お喜びを申し上げます。。

さて、校舎改築につきましては一方ならぬご心配を賜わり、有難く厚く御礼を申し上げます。

お陰様にて昨年は建築棟、本年は機械棟の竣工を見、只今は、来年七月完成を目途に商業・家政棟の建築に着手しております。今後は旧電気科、機械科の建物を取壊し運動場の整地を予定している次第です。

管理棟前の造園、門扉、生徒自転車置場等も立派に竣工いたしました。是非ご来校の上、ご覧頂きたくお待ちいたします。

次に、前会報にてご報告後の改築経過につき申し上げます。

五〇・一〇・三一　建築棟入札　宮下組
五〇・一二・八　建築棟電気工事、衛生設備工事入札　電気工事　柳沢電気商会　設備工事　上野設備
五一・二・九　渡り廊下入札　宮下組
五一・二・一八　旧校舎解体工事入札　宮嘉組
五一・二・二七　旧校舎解体開始
五一・三・二五　フェンス入札　日通
五一・三・二五　旧校舎解体完了、フェンス完成
五一・四・三〇　造園工事入札　宮下組
五一・七・九　建築棟竣工検査
五一・七・一六　建築棟へ移転開始
五一・九・六　正門開通式
五一・九・一七　自転車置場等入札　宮下組
五一・一〇・二九　機械棟入札　宮下組、
五一・一二・一〇　機械棟電気工事、衛生設備工事入札　電気工事　石井電気　設備工事　東信設備
五一・一一・一七　自転車置場、周辺舗装竣工
五一・一二・一　鉄筋コンクリート塀、門扉取付竣工
五一・三・三　屋外照明工事入札　東海電気
五一・三・三一　屋外照明才一期工事完成
五一・六・一　焼却炉火入れ式
五一・六・三〇　機械棟竣工検査
五一・七・九　自転車置場、周辺舗装竣工
五一・七・一三　機械棟移転開始
五一・八・二二　商業・家政棟入札　小幡建設

同窓生の皆さんへ

生徒会長　伊藤　満

昨年、一昨年の千曲祭は校舎の新築工事のため一般開放できずじまいでしたが皆さまの御協力により、ようやく全工事の七割ぐらいが完成しました。そこで生徒会では本年こそ千曲祭を一般開放にしようと計画して今日まで準備を重ねて、文化の日をえらびました。

つきましては完成した校舎の見学がてら、新しくスタートした我々の千曲祭を見ていただき、先輩達の御意見、御指導をいただければ幸いです。

定時制野球部
全国大会出場

七月三日、松本市営球場において甲信大会決勝戦。山梨県立吉田高校を破り、第二十四回全国高校定通制軟式野球大会出場権を獲得。八月十二日、神宮球場で開会式。八月十六日、埼玉県越ケ谷球場において青森代表三沢高校と対戦し、1―4にて惜敗。

生徒数四十二名、十一名の野球部員、校舎改築途上にあってグランドにも恵まれない等の悪条件を克服し、全国大会出場をはたした定時制野球部に対して盛大なる拍手を送ろう。試合には惜敗したがこの貴重なる体験はこれからの人生に大きな勝利をもたらすものと確信する。今後もこれを基礎に頑張ってほしい。

＊寄稿＊
中国の思い出から

昭和四十年電気科卒　大村忠嗣

一九七五年、秋、昭和五十年機会を得て中国を訪れた。日中国交回復から三年目であった。ジェット機で六時間（東京―北京）のところにありながら、近くて遠い国であった。当時の田中首相の英断によって、一日足らずで行けるようになってから、ぜひ訪れたいと思っていた。

日本を出るときは雨が降っていた。羽田から大阪へ、そして一路上海へと飛んだ。九州上空を通過する頃には、眼下に島国日本の海岸線が見えるまでに晴れ上っていた。しばらく海の上を飛んでいたジェット機の窓からは、いよいよこれから訪れる中国大陸の海岸線が見えはじめた。ゆっくりと高度を下げて、広々とした上海空港に着陸した。日本が見えなくなってから、ほんの二時間ぐらいであろうか。時計を一時間遅らせて時差を合せ、入国の手続きをして再び同じ飛行機で北京へ向った。

こうして私の中国の旅ははじまった。紙面が許すなら、今でも鮮明に記憶に甦えってくる感動の訪中記を綴りたい。しかし、二年の歳月を経て、毛沢東、周恩来、朱徳という指導者が世を去り、「四人組事件を経て一層活気にあふれる現在の中国があることを思うとき、私は「大寨」での感動を少し書くことにしたいと思う。

ここは御存知のように、中国の農業の手本とされている山村である。かっては、七つの谷と八つの山に囲まれた農地の少い貧しいところであったという。しかし、私たちの見た大寨はそのようなことが信じられない程にりっぱな農村であった。至るところに耕地があり、住宅が整って「ほんとうに」と思う程である。北京から私たちを案内してくれた通訳の中国の人さえ「ここは日毎に変化している。今に大寨の人達はここを平野に変えてしまうかも知れない。」と言うくらいである。

「農業を基礎とし、工業を導き手とする」。「自力更生」「克苦奮闘」という毛主席の方針をまさに地でいく中国農村の典型であることは、行く先々で見た農村との比較において疑う余地のない現実である。欲ばった参観計画を持っていた私たちの大寨での日程は二日しかなかったが、説明を聞き、自分の目で確かめつつ歩くなかで、私は人間の力の底知れないものを見たような気がした。

日常生活は日本の生活と比べて、表面的に見るなら「遅れている」と言えるだろう。しかし、活気が違う。人々はのびのびしている。老若男女がそれぞれの役割を発揮して働いている。

私が特に感動したのは、大寨の指導者であり、副首相となっている陳永貴さんの話であった。この小さな山村を典型中の典型に造り変えた指導力もさることながら、今でも必ず大寨に帰るとクワをかついで他農民と一緒に働くという。どこかの国の「偉い人」とは大違いだ。肩書と実権とで人を従わせ、その力の大きい程「出世した」と言われる国の人間には信じがたいことである高い地位についても、いつも謙虚にふるまい、労働に参加する。それがわざとらしいものではなく、誰が見ても真の姿として人の目に写る。陳永貴さんを語る大寨の人たちのことばから、それが感動として伝わって来た。それでなければ、人の心を動かし山をくずして谷を埋め、何度も洪水で流されても、繰返し建設するという、大事業に多くの人々が動くはずがないと思った。強制力で人が動くのではないことが良くわかった。

この大寨は中国の他の地域でも見た農村の目標となり、八億を越える中国人の食糧自給と「食糧をたくわえ、戦争にそなえる」という中国の政策を実現し、着実に発展する中国をささえている。

日本に帰って二年、今年も稲の収獲がはじまっているが、米作農家の人達が「豊作でも出価調整で割当され、残った米は自主流通業者に買いたたかれてしまう。」というのを聞くたびにあの大寨が目に浮んでくる。これは、中国のほんの一部の紹介に過ぎない。しかし、「実力さえあれば」と言いきかせて「出世」のために奮闘していた自分が、社会を知り、自分の力を知っていくなかで、世界に目を開いて知っていった中国の姿を、自分の目で見た感動はいつまでも忘れることはできない。

「せまい日本、そんなに忙いでどこへ行く」。というむなしい交通標語にみる自分の国、差別があふれ、いや応なしに高度成長にもみくちゃにされ、あふれでる公害に悩まされている日本。不況とあればたちまち生活は切りつめられてくる。就職もままならなくなる。九才や十二才で自殺する子供が出たり、やり場のない若さを暴走ではきだす青年達があふれている日本。そんななかで百%中国が良くて百%日本が良くないなどと言うつもりはないが、日本の未来に生きる一人の青年として、私は、しっかりと中国の人達から学びたい。

なつかしい高校の外観は今、大きく変わりつつある。私は少し生意気だと思いながら、同じ学舎から巣立って行く後輩たちに、生活は苦しくても、仕事がつらくても、きっと大きく目を開いて、世界に目を向け、日本の将来を見つめてほしい。きっと感動あふれる日々を過してほしいと願いつつペンを置きたい。

＊寄稿＊
所　感

昭和四十四年機械科卒　橋詰一夫

高校時代私は、教師になることが目標であったはずだが、大学生活を通して変質したのか？現在建設労働者の一員として日々を送っている。今にしてみれば、一風変った軌跡に思えるのだが、当人としては、それぞれの場で精一杯やってきたという満足感みたいなものの方が強いのである。高校時代の私達のクラスを知る人達は、卒業後の意外な姿に接し、戸惑いを隠せない様子である。というのは俗に言う不良学生、否、個性的な人間が多かったからであろうか、いわゆる「問題的クラス」であり随分と担任教師であったO氏を悩ませたものである。しかしながらO氏の底流には、和をもって人を創り上げていく、互いの肌を探りながら人間相互の思いやりみたいなものを高揚せしめていく。といったものが流れていたのではないかと思える。卒業以降、「O氏を囲んでの会」は出席率も高く、相変ずホームルームの延長の感がある。ほとんど皆が自由に喋り合いそれで終るというパターンで、実りあるものは、何一つとして出てこないわけである。しかしながらその場で生れた和は、その後実生活、互いの生活ベースの中で、確実に、実りある方向性を持たせているようだ。それは互いの気質を、環境を、視野の方向を知り合えたことに基づいているからではないかと思える。今後もクラス日記は、そのページを増していくだろう。現在私は、先に記した建設労働者の生活の一方で、小学生・中学生を対象とした塾を昨年開講し、八十余名の塾生を見つめ、高校時代の目標とは違うが、同一的な内容ではないかと自負している。移りゆく時と世代であるが、英語を担当している関弥州武君（四十九年機械科卒）とのミーティングでは、共に教育的立場が一致することが多い。一つ、一つの試行の中で結論は下せないが、その一つの試行の中から新たな試行へ向けての糧が必ず生まれるだろうという気構えである。彼もまた高校時代の体験を通して教師になることを志したようである。来春彼は教育現場えと赴くが、塾で育てた塾生達が多かったところからみてより多くの学生達を育てていくだろうと思える。今年の夏、彼と一諸に塾生を連れて市民の森へキャンプに出掛けた。キャンプファイヤーをしていた時のこと、我々のテントから遠く離れた別のグループから千曲の校歌が聞こえたので、一諸に口ずさんだ。二人で千曲の校歌はいい、皆、それぞれ高校時代に感じるものがあるんだ、と感概を深くしたわけである。多くの同窓生の方達が、それぞれの場所で活躍していることと思われ、千曲の校歌に乾杯した。私自身高校生活を通して培われたものも多く、また現在の仕事の上で多くの同窓生の方から協力していただいている。来春千曲から新卒者を会社に迎える。

私自身が諸先輩から育てていただいた何分の一になるか判らないが、後輩を立派に育てていきたいと思っている昨今である。

事務局便り

秋も深まり朝夕肌に寒さがしみこむ頃となりました。

同窓生の皆様方御健勝のことと拝察致します。

年に一度の総会を目の前にひかえ「同窓会便り」をお届けできますことは事務局一同喜びにたえません。

新装なった上田千曲高校は名実ともに県先輩諸兄姉にこの母校の姿をぜひ見ていただきたいと願っておりますと同時に今日までの母校発展のための陰陽にわたる皆様方の御協力にあらためて厚く御礼申し上げる次第です。

今、澄みきった青空のもと躍動している在校生の幸せな姿を御想像下さい。

昨年来　支部名薄作成と支部づくりに力を入れて、市町村別の名薄も完全とは言えませんが完成致しました。中南信支部の発会式もあり、市町村単位での支部づくりを希望される地区は御利用していただきたいと思います。

事務局ではこの同窓会便りが同窓生の交歓の場となるよう編集には心を痛めておりますが一方的な便りとなっていますことをここに深くお詫びをするとともに皆様同窓生の御寄稿を願っております。

なお、同窓生名薄も昭和五五年を目途として発刊したいと思いますので住所変更等されたときは、必ず同窓会事務局宛にお知らせ下さい。

母校「校舎全面改築賛助会費」納入御芳名●最終号●

（注）一、昭和五〇年四月一日より昭和五二年三月末までの納入者御芳名を掲載してあります。
二、職場一括でお取纏め戴いたものは職場単位、個人でお支払戴いたものは科別に掲載してあります。

旧職員
掛川まさと　三〇、〇〇〇
木村金一郎　三〇、〇〇〇
宮本迪彦　一〇、〇〇〇
久保敏　一〇、〇〇〇
矢崎秀彦　一〇、〇〇〇
瑞枝
石坂信也　一〇、〇〇〇
小布施睦夫　一〇、〇〇〇
佐竹盛夫　一〇、〇〇〇
田中光広　五、〇〇〇
宮坂直次　五、〇〇〇
山浦正孝　五、〇〇〇
宮沢肇　五、〇〇〇
小宮山文子　三、〇〇〇
宮尾まさ子　三、〇〇〇
（竹越）塚田あや子　三、〇〇〇
内川昇　一、〇〇〇

上田千曲高校同窓会　中南信支部
昭24建　芦沢直人　一〇、〇〇〇
昭22建　飯島和夫　一〇、〇〇〇
昭28建　片倉清彦　一〇、〇〇〇
昭27建　内藤規　一〇、〇〇〇
昭41建　本間仙一　一〇、〇〇〇
昭28建　小出義延　一〇、〇〇〇
昭23建　鈴木由了　一〇、〇〇〇
昭31建　赤塚幸次朗　五、〇〇〇
昭30建　石合富雄　五、〇〇〇
昭25建　大矢利男　五、〇〇〇
昭48建　渡辺幸郎　二、〇〇〇
昭24普（茅野）飯島喜久子　二、〇〇〇

事業所及び支部
（株）西野建設　西野清　三〇、〇〇〇
昭30建　上幸田男
（株）長野建設
昭42建　峰村光夫　一〇、〇〇〇
昭47建　田島一男
昭50建　浅川健司
戸田建設　名古屋支店
昭35建　橋詰忠義　一四、〇〇〇
昭35建　高山英紀
昭36建　木円伝
昭38建　三井光弘
昭40電　土屋一任
昭43建　山部和久
昭46建　小山誉洋
小山税務会計事務所　三〇、〇〇〇
宮原酸素店　一〇〇、〇〇〇
昭21機　宮原重雄
建築科
昭50　尾芦進　一〇、〇〇〇
昭25　丸山昇一　一〇、〇〇〇
昭35　清水泰男　一〇、〇〇〇
昭25　小山高弘　一〇、〇〇〇
昭25　吉村次男　一〇、〇〇〇